



“よねやま”から広がる新しい世界 ⑳

身近になった遠い国・トーゴ



新発田城南 R C
(第 2560 地区 新潟県)

カウンセラー

長谷川寿一 さん

名前も知らない国から

アドゥアヨム アヘゴ・アクエテビ君は、西アフリカのトーゴ共和国からの留学生です。カウンセラーを引き受けることになった私は、手元に届いた彼の資料を見て驚きました。てっきり、採用数の多いアジア系の学生だろうと思っていたのがアフリカ、しかも「トーゴって、どこ？」と（笑）。実を言えば、それまでトーゴという国があることさえ知りませんでした。私だけでなく、大半の会員にとって、初めて名前を聞く国だったのです。

慌ててトーゴについて勉強したものの、正直、「本当にカウンセラーが務まるのか」と心配していました。けれども、5月のオリエンテーションで彼に会った時、そんな不安は吹き飛びました。驚いたのは、彼の語学力。母国語、フランス語、英語はもちろん、日本語も流ちょうに話し、田舎のなまりがある私より堪能なくらいでした。その上、親しみやすい性格で、クラブの行事にも全て参加し、私や家族、ほかの会員とも打ち解け、すぐに古くからの友人のような関係になりました。



授学期間後も、会員宅での食事会に呼んで交流

アヘゴ君によると、トーゴから日本に来ている留学生は、彼と彼の双子の兄の二人だけなのだとか。それほど珍しい国からの留学生なので、もっと日本の文化を体験してもらいたいと、当時の国際奉仕委員長が発案で、7～8人の会員有志が持ち回りで彼を自宅に招き、毎月1回、食事会を開くようになりました。幸い、彼は好き嫌いもなく、各家庭とも喜んで、心を尽くしてもてなすことができました。この集まりは、彼が卒業してからも続いており、今は中国出身の米山奨学生のために開いていますが、毎回、彼も必ず呼んで、一緒に交流しています。

彼の志に、心打たれて

クラブでは、彼の前に4人の米山奨学生を受け入れましたが、そのカウンセラーたちはほとんど退会しており、若い会員の米山に対する関心が薄れている時でもありました。それが、彼が来たことをきっかけに、また盛り上がりが出てきた気がします。実際、「寄付は強制ではなく、自発的な意思とするもの」というクラブの確固たる方針があるのですが、最近では、寄付をした会員の名前を発表したり、協力を呼びかけたりして、米山への寄付に対する意識もずいぶん高くなったように思います。

アヘゴ君が義肢装具について学んでいることから、東京で開催された義肢装具の展示会に二人で一緒に行ったことがあります。彼が、それはもう目を輝かせて熱心に見ていたのが印象的でした。「故郷に義肢の研究室をつくりたい」という彼の希望を聞き、会員有志でトーゴに行こうという話も出ました。具体的にどのような支援ができるか、現地を視察する計画でしたが、エボラ出血熱の流行で、断念せざるを得ませんでした。しかし、日本で学んだ技術をアフリカの人たちのために役立てたいという彼の志は、心を打たれるものであり、できる限り後押ししたいと思っています。

名前も知らなかったトーゴという国が、彼との付き合いを通じて、少し身近になりました。「国の説明がされる時、よくトーゴはガーナの隣と言われるけど、トーゴの隣がガーナだ、となるといいな」と、彼には話しています。これからも、アフリカと日本をつなぐ懸け橋になってほしい、それがわれわれの願いです。

トーゴという国をご存じですか？ 西アフリカのトーゴ共和国は1960年に独立した、まだ新しい国。今回ご紹介するのはトーゴ出身の初の米山学友、アドゥアヨム アヘゴ・アクエテビさんと、カウンセラーの長谷川寿一さんです。日本で義肢装具について学び、アフリカの人のために役立てたいという大志をもつアヘゴさんを、世話クラブの全会員が応援していると語る長谷川さん。お二人に、これまでの交流を振り返っていただきました。



米山学友
アドゥアヨム アヘゴ・アクエテビさん

出身：トーゴ
奨学期間：2014 - 15
学校名：新潟医療福祉大学大学院

値千金の応援を受けて

トーゴのような発展途上国には、義肢装具を必要とする患者が大勢います。今後、専門家をもっと必要になると考え、私は母国の大学で、義肢装具士になるための専門知識を学びました。この分野では、新しい技術が次々と開発されています。義肢の製作技術だけでなく、バイオメカニクス（運動力学）の面から、義足を使った歩行について学びたいと、日本留学を決めました。日本は、義肢装具分野ではトップクラスの設備や研究環境にあるからです。

新潟医療福祉大学大学院の修士課程に入学し、2年目に米山奨学生に選ばれました。私にとって、新発田城南RCの皆さんとの出会いは、とても光栄なことです。カウンセラーの長谷川さんをはじめ、世話クラブの皆さんには、今も変わらずお世話になっています。食事会に毎月誘ってもらい、交流を深めています。新潟の自然と食文化が大好きな私には、とても楽しいひとときです。何より、私の夢を信じてくれている皆さんからの応援は、“千金に値する”と感じています。

アフリカの学生のために道をつくりたい

現在は博士課程に進み、将来、アフリカの医療と社会の発展に貢献するという夢に向かって、研究を続けています。今後はアフリカで義肢装具分野を発展させていかなければなりません。そのためにも、若い人材を育てることが大事です。私が習得した国際レベルの知識と技術、日本で受けた教育の全てをアフリカの学生たちに教えたい。そして、トーゴと日本の国際交流を促進し、日本の優れた技術を学生たちがより身近に学べるよう、道をつくっていきたいと思っています。

昨年、義足の普及活動と研究を目的に、義肢装具のサテライトオフィスをガーナに開設しました。日本の義足製作企業から部品を集め、それをリサイクルして、現地で安価で高品質な義肢装具の製作に取り組んでいこうとしています。また、ガーナでの研究をまとめた論文は、学会誌への掲載が決まりました。博士号取得に向け、これからも研究に励みたいと思います。

いつか、私がつくった義足を使って、トーゴの選手をパラリンピックに出場できるようにするのが目標の一つ。夢の実現を目指してがんばります。

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または“よねやまだより”についてのご意見を、公益財団法人ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

Tel. 03-3434-8681 Fax. 03-3578-8281

Eメール：mail@rotary-yoneyama.or.jp



感謝と歓迎の気持ちにあふれた総会 —— 台湾米山学友会総会 ——



日本語で「花」を熱唱する役員たち

台湾米山学友会（中華民国扶輪米山会）の総会が12月17日に桃園市内で開催され、台湾の学友90人のほか、日本在住、ならびに韓国、タイ、マレーシアの学友、当会の若林紀男副理事長と岩邊俊久事務局長を含む多数のロータリアンなど総勢136人が集いました。総会では新会員の紹介や、同学友会が支援する日本人奨学生への奨学金授与などのほか、「形式ばらない総会に」との呉憲璋理事長の方針により、呉理事長が自らピアノを演奏、理事と監事が日本語で「花」を熱唱し、歓迎の気持ちを表しました。懇親会では、陶芸家の張義明氏の作品がチャリティーオークションにかけられるなど、例年以上の盛り上がりを見せました。